学位論文要約データ

論文題目：
室内空間の視覚要因がコミュニケーション関連の認知・行動に及ぼす影響

氏名：
石川敦雄

本論文では，職場におけるコミュニケーションを対象として，コミュニケーションの「場」であるオフィス空間のデザインに資する知見を獲得するという観点から，室内空間の視覚要因がコミュニケーション関連の認知・行動に及ぼす影響を検証した。検証に当たっては，その影響過程を媒介する心理要因として，自己の感情状態，相手の性格印象，自己と相手との心理的距離の 3 つに着目した。

第 1 章「室内空間がコミュニケーション関連の認知・行動に及ぼす影響」では，職場におけるコミュニケーションが置かれている現状を示し，関連分野の先行研究を概観するとともに，先行研究の限界を明らかにした。職場におけるコミュニケーションが置かれている現状については，組織科学分野の先行研究をレビューし，組織のパフォーマンスや心の健康に及ぼす影響，組織内の信頼醸成との関係について明らかにした。職場におけるコミュニケーションと「場」としてのオフィス空間との関係については，建築学分野における先行研究を概観した。職場におけるコミュニケーションに関連する心理学分野の研究としては，室内空間の物理的環境がコミュニケーションに関連する認知・行動に及ぼす影響に関する先行研究をレビューした。具体的には，顕在的影響過程と潜在的影響過程をそれぞれ定義し，物理的環境からの顕在的影響過程，潜在的影響過程のそれぞれに関する先行研究を概観した。さらに，先行研究から室内空間の物理的環境がコミュニケーション関連の認知・行動に及ぼす影響過程に関するモデルとその研究方法を整理した。これらを踏まえて，先行研究の限界を示し，本論文の位置づけについて明らかにした。

第 2 章「本論文の目的と構成：仮説的モデルの提案」では，第 1 章で示した先行研究の限界を踏まえて，室内空間の視覚要因がコミュニケーション関連の認知・行動に及ぼす影響過程に関する仮説的モデルを提案するとともに，本論文の目的と構成を示した。提案する仮説的モデルでは，心理学分野の先行研究に基づき，影響過程を媒介する心理的要因として，自己の感情状態，相手の性格印象，自己と相手との心理的距離をそれぞれ採用した。また，ヒトの視覚情報処理過程，環境心理学等に関する先行研究，建築空間デザインにおける経験的な知見等に基づき，室内空間の広さ，明るさ，色み，テクスチャー，自然性に関する印象の 5 つの視覚要因に着目した。最終的に，仮説的モデルとして採用する室内空間の視覚要因，影響過程を媒介する心理的要因をそれぞれ明らかにした上で，本論文の目的と構成について述べた。

第 3 章「室内空間の視覚要因がコミュニケーションに対する期待に及ぼす影響：媒介する感情状態の検討」では，提案する仮説的モデルの部分的な検証として，室内空間の視覚要因が自己の感情状態を媒介してコミュニケーションに対する期待に及ぼす影響を検証した。コミュニケーションに対する期待としては，先行研究を踏まえて「議論の広がりに対する期待」,「議論の深まりに対する期待」を採用した。具体的には，社会人を参加者として室内空間画像，並びに人物・室内空間合成画像を用いて，室内空間の視覚要因とコミュニケーションを通じての議論の広がり，あるいは深まりに対する期待との関係についてマルチレベル相関分析，パス解析等を通じて検討した。パス解析の結果，議論の広がりに対しては，自己の感情状態である「快適ー不快な」が室内空間の視覚要因からの影響過程を媒介していることに加えて，室内空間の視覚要因の中で，室内空間の自然性に関する印象である「人工的ー自然な」が，自己の感情状態を媒介せずに議論の広がりに対する期待と正の係数で結びついている可能性を明らかにした。議論の深まりに対しては，自己の感情状態である「快適ー不快な」が室内空間の視覚要因からの影響過程を媒介していることに加えて，室内空間の視覚要因の中で，室内空間の広さに関する印象である「広いー狭い」が，自己の感情状態を媒介せずに議論の深まりに対する期待と負の係数で結びついている可能性を明らかにした。

第 4 章「室内空間の広さ・明るさが信頼に対する期待に及ぼす影

響：媒介する性格印象の検討」では，提案する仮説的モデルの部分的な検証として，室内空間の視覚要因が相手の性格印象を媒介して信頼に対する期待に及ぼす影響を検証した。検証に先立ち，相手の性格印象が室内空間の視覚要因から受ける影響について先行研究を整理した。研究 2 では，社会人を参加者として室内空間画像，人物・室内空間合成画像を用いて，室内空間の視覚要因である広さと明るさから信頼に対する期待への影響過程について分散分析，因子分析，パス解析等を通じて検討した。性格印象に関する因子分析の結果，「協力的な」，「善良な」，「道徳的な」，「寛容な」，「思いやりのある」が高い負荷量を示す「共同性」因子と，「合理的な」，「知的な」，「冷たい」，「執念深い」，「支配的な」が高い負荷を示す「作動性」因子の 2 因子が抽出された。研究 2 では，室内空間の広さに関する「広々した」印象と，室内空間の明るさに関する「一様に明るい」印象が，相手の性格印象の 1 つである「共同性」因子を媒介して，信頼に対する期待と結びついていることを明らかにした。研究 3 では，広さと明るさを統制した室内空間 CG を用いて，社会人を参加者として，研究 2 と同様の検討を行った。その結果，室内空間の広さに関する「広々した」印象が，相手の性格印象の 1 つである「共同性」因子を媒介して，信頼に対する期待と結びついていることを示した。

第 5 章「室内空間の視覚要因がコミュニケーション関連の認知に及ぼす影響：媒介する感情状態，性格印象，心理的距離の検討」では，提案する仮説的モデル全体を検証するため，室内空間の視覚要因が自己の感情状態，相手の性格印象，自己と相手との心理的距離を媒介してコミュニケーション関連の認知に及ぼす影響を検証した。自己の感情状態としては 2 次元気分尺度(坂入・徳田・川原， 2003)を，相手との心理的距離の測定には，先行研究を参考に心理的重なり尺度(IOS)(Aron, Aron, & Smollan, 1992)をそれぞれ採用した。研究 4 では，社会人を参加者として室内空間画像と人物・室内空間合成画像を用いて，室内空間の視覚要因からコミュニケーション関連の認知への影響過程についてマルチレベル相関分析，パス解析等を通じて検討した。パス解析の結果，室内空間の明るさに関する「明るいー暗い」印象，室内空間の色みに関する「あたたかいーつめたい」印象が相手の性格印象の第一因子である「共同性」因子，2 次元気分尺度の「快適度」として測定される自己の感情状態を媒介してコミュニケーションに対する期待と結びつくことを示した。さら

に，室内空間の自然性に関する「自然なー人工的な」印象が心理的重なり尺度で測定される自己と相手との心理的距離を媒介してコミュニケーションに対する期待と結びつくことを示した。また，信頼に対する期待である「信頼できる」評価に対しては，コミュニケーションに対する期待から正の係数のパスで結びついていることに加えて，性格印象の「共同性」因子からも正の係数のパスで結びついていることを明らかにした。

第 6 章「室内空間の明るさがコミュニケーション関連の認知・行動に及ぼす影響」では，コミュニケーション関連の認知への影響だけでなく，現実の空間で行われるコミュニケーション行動に及ぼす影響について検討した。研究 5 では，室内空間の明るさを明条件，暗条件の 2 条件に設定した実験室において，社会人を参加者として，実験協力者との間で特定の話題に関するコミュニケーション行動実験を実施し，室内空間の明るさが発話行動や沈黙行動，対人距離等に及ぼす影響を検討した。実験の結果，暗条件の方が明条件よりも面接者とのコミュニケーション後にリラックスした気分が高まり，会話満足度が高まること等を明らかにした。また，暗条件の方が明条件よりも，対人距離が短くなる等，実際のコミュニケーション行動にも影響を及ぼすことを明らかにした。

第 7 章「全体考察」では，本論文全体を展望するとともに，室内空間の視覚要因がコミュニケーション関連の認知に及ぼす影響，ならびに室内空間の明るさがコミュニケーション関連の認知・行動に及ぼす影響について述べた。さらに，本研究の意義を述べるとともに，コミュニケーションを促進する室内空間デザインの実践への示唆，今後の課題について論じた。